

第四章

人間そして家族、その奇跡の歴史の根源に迫る

1 まずは「家族」とは何かを考える前に

ここでは、人間の新たな社会的生存形態「菜園家族」を基軸に二一世紀社会のあり方を構想していくことになるのであるが、「家族」というものについては、歴史的にも実にさまざまな評価がなされてきた経緯がある。特に近代に入るとその評価はきわめて否定的なものになり、今日に至ってもその傾向は根強く存在している。一方、生命系の未来社会論具現化の道である「菜園家族」社会構想においては、むしろ「家族」がもつ積極的な側面を再評価し、これを地域や社会の基底を成す不可欠の基礎的共同体として、あるべき未来社会の多重・重層的な地域構造を下から形づくり支える大切な役割を担うものとして位置づけている。

「菜園家族」を基調とする二一世紀の社会構想の具体的な内容に入る前に、まずこの章では、今なぜ「家族」に着目し、それを重視しなければならないのかを明らかにするために、「家族」とは本来、人類にとつていかなるものであるのかをあらためて見つめ直すことから始めたい。

ここでは、本書のテーマに関連して重要と思われる先学たちの代表的な研究成果、時実利彦『人間であること』（岩波新書、一九七〇年）、三木武夫『胎児の世界―人類の生命記憶―』（中公新書、一九八三年）、アドルフ・ポルトマン著、高木正孝訳『人間はどこまで動物か―新しい人間像のために―』（岩波新書、一九六二年）に依拠して、まずは「家族」とは一体何かを自分なりに納得のいく説明をしておきたい。なかならずスイスの著名

な動物学者ポルトマンは、その著書の中で人間に特有な「常態化した早産」による生まれたての赤ん坊の状態に起因して派生した「長期にわたる擁護」が、人間に特有の「家族」をもたらしたと述べている。そしてその「家族」が、他の動物一般に見られない異常なまでの脳髓の特異な発達を促す根源的で基底的な役割を果たしていること。つまり、ヒトを今日の人間たらしめたものは「家族」にある、と結論づけている。

一方、アフリカ各地で長年ゴリラの野外研究に専念し、類人猿の生活とその社会的特徴を研究してきた山極寿一氏の近著『サル化』する人間社会(集英社、二〇一四年)、『家族進化論』(東京大学出版会、二〇一二年)でも、人類史における「家族」の根源的な意義について、基本的にはポルトマンと同じ結論に達している。この両者の結論の一致は、偶然とは言え、一方が野外研究という研究方法上の対照的な側面からのアプローチによって到達した結論であるだけに、時空を隔てながらも巡り合ったこの一致の妙の単なる興味以上に、二一世紀の未来社会構想を「家族」のもつ根源的な意義を重視し、それを基礎に展開していく本書にとつては、何とも心強い証左を得た思いがする。

「家族」の評価をめぐる歴史的事情

「家族」をどう評価するかについては、一九世紀前半のロバート・オウエンに代表されるいわゆる空想的社会主義者たちや、その後のいわゆる科学的社会主義者たちの描いた未来像の中では、一概に、極めて低く否定的にしか扱われていなかった。中には単純に復古的心情から、中世の家長的家族への回帰を主張する論者もいたものの、いずれにしても、「家族」というものの考察と評価は、十分に深められていなかったと言えよう。

さらに後になると、個々の家族の育児・炊事等々の家事労働を社会化すれば、何よりも女性が解放されるとして、次第に家族廃止論にまで行き着く傾向すらあらわれてきた。当時としては、反封建主義を旗印に掲げる啓蒙的、革新的思想の立場から、むしろ家族のもつ閉鎖性や狭隘性、そして保守的で頑迷な性格の除去と、女性の負担軽減や地位向上に最大の関心があったと言える。当時の時代が要請する課題からすれば、そのような主張や議論が起こるのも、ある意味では当然のことであったと言わなければならない。こうした時代背景の中で、マルクスやエンゲルスの場合も、未来社会における「家族」の位置づけとその役割についてほとんど具体的に触れることはなかったし、いわんやそれを未来社会の中に積極的に位置づけ論ずるといふことはなかった。

エンゲルスは晩年、モルガンの『古代社会』に依拠して執筆した古典的名著『家族・私有財産および国家の起源』(一八八四年)において、わざわざモルガンの言葉を引用し、家族の未来について次のように述べている。「将来において、単婚家族が社会の要求を満たすことができなくなればあい、そのつぎにあらわれるものがどんな性質のものであるかを、予言することは不可能である」。このことから分かるように、「家族」への主要な関心は今日とは違い、別なところにあったことだけは確かであろう。

特に近代における「家族」についての評価には、こうした歴史的事情や時代的制約があったことを、まず念頭においておく必要がある。しかしながら、私たちは今、それからおよそ二〇〇年もの歳月を隔てた二一世紀に生きている。世界を覆い尽くす市場原理至上主義「拡大経済」の凄まじい渦の中で、あの時代からはおそらく想像もつかなかった新たな事態に遭遇している。家族の崩壊が進む中で人と人との絆が失われ、人間が徹底的に分断され、多くの人々が恐るべき「無縁社会」の出現に戸惑い苦しんでいる。私たちは、この恐るべき事態を目の前にして、あらためて人間とは、「家族」とは一体何なのかという、この古くて新しい問題に新たな角度から光を当て、考え直すよう迫られている。未来社会のあるべき姿も、こうした根源からの問いと現実への深い洞察によつてはじめて、新たな像を結ぶことが可能になってくるのではないだろうか。

2 人間の個体発生の過程に生物進化の壮大なドラマが

人間と「家族」を根源的に掘り下げて考察するために、ここでいったん、人間の個体発生と系統発生の問題を考えることからはじめたい。

人間の生涯は、たかだか六〇年とか七〇年、長くても八〇年とか九〇年に限られた短いものである。この人間の生涯は、卵子と精子の受精によってはじまる。

周知のように、受精卵は子宮壁粘膜に着床すると、子宮内で胎児として発育し続け、十月十日とつきとおかの後に産まれる。胎児が母体外に産まれ出ると、胎児と胎盤を結んでいたへその緒は切断され、それと同時に新生児は、呼吸・排泄・摂食などを自分の力でやらなければならなくなる。しかし、誕生間もない新生児は、まだ自分の力だけで生きていく能力はなく、何よりもまず母の授乳を受け、「家族」という厚い庇護のいわば胞膜の中で成長する。やがてことばを覚え、一般の哺乳動物のように四つ足で這うことからはじめ、二足直立歩行へと発達を遂げ、様々な発育段階を経て成人に達する。

この人間の受精卵から成人までの発達過程(個体発生)に注目すると、生物進化の道すじ(系統発生)を推測することができると言われている。これに関連して、ドイツの動物学者ヘッケル(一八三四〜一九一九)は、「個体発生は、系統発生を繰り返す」という有名なテーゼを残している。つまり、母体内で胎児として発育を続け、やがて産み出され成人になるまでのわずか数十年の個体発生の過程には、三十数億年前といわれる生命の発生の始原から、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類を経て人類の出現に至る生物進化の過程が凝縮されている、というのである。

生命のふるさととは、三十数億年前の海の中であった。植物と動物が菌類を仲介として向かい合う今日の生態環境の基礎が、すでにその時、太古の海を舞台にできあがっていたのである。そして四億八〇〇〇万年前の海に、最初の脊椎動物(魚類)が姿をあらわす。

その後、鰓呼吸と肺呼吸を使い分ける両生類があらわれ、やがて生命発生以来、三〇億年間の水の生活に別れを告げて、陸の生活に踏み切った脊椎動物が出現する。それが、今から三億年前のデボン紀から石炭紀にかけての時代に、古生代緑地上陸の第一歩を印した最古の両生類イクチオステガだったのである。この地球の古生代の物語は、「脊椎動物の上陸」と呼びならわされている。そして、脊椎動物は、その後、両生類から爬虫類へ、さらに鳥類・哺乳類へと分岐しつつ、人類へと進化していった。

この三十数億年という生物進化の壮大なドラマが、現代のこの私たち人間のわずか数十年の個体発生の過程の中に、今でも繰り返されているとは驚くべきことである。人間のいのちの不思議さと同時に、生命の「深層」の深さと重みをずっしりと感ぜずにはいられない。

母胎の中につくられた絶妙な「自然」

人間の胎児は、母の子宮内の羊膜の中にたたえられた羊水にまもられて、十月十日間とつきとおか、ここで成育する。羊水の組成は、古生代海水のそれと酷似していると言われている。「脊椎動物の上陸」が、「海水をともなつて」おこなわれたことの紛れもない証拠でもある。胎児の尿管の血管は、へその緒を通して胎盤に到達し、母胎の血流と交わる。ここでガス交換と併行して、栄養物の吸収と老廃物の排泄がおこなわれる。したがって、栄養物を蓄える卵黄膜の袋も排泄を助ける尿膜の袋も、本格的に働くことなく、ただ遠い太古の卵生時代の名残りをとどめるだけになっている。これに対して、羊膜の袋は、満々と羊水をたたえている。

つまりこれは、まず、生物進化の道すじである系統発生の原初の生命から、魚類、両生類といった段階の、海の中での最も繊細な進化過程の再現を庇護するかのよう、母胎の中にわざわざ「太古の海」を用意していると見ることが出来る。そして、出産、つまり胎児が母胎から外に生まれ出て陸地にはじめて「上陸」す

る時に備えて、胎児と胎盤を結びわば「海中パイプライン」とでもいうべきへ、その緒を連結することによって、栄養物と老廃物の新陳代謝がおこなわれるようにし、胎児が子宮の中の「太古の海」にいながら、陸上の進化である爬虫類から哺乳類までの発達が遂げられるように保障している。こうすることによって、胎児が母胎の「海」から陸上に出た時、陸上生活にふさわしい哺乳類として、人体のすべての器官が完備されるまでに発達するように配慮されている。生命の誕生のために母胎の中に「太古の海」を用意し、人間へのさらなる進化のために「海中パイプライン」まで用意する。神の摂理としか言いようのない絶妙な「自然」が、そこにはつくりだされているのである。

胎児は、十月十日、母なる「太古の海」、つまり羊水に浸かって過ごす。胎児は、親指の先ほどの大きさになると、まるで魚のような姿をして、目や耳、それに鰓えらまでみとめられる。舌の輪郭が定まり、神経もできてきて、感覚も運動も可能になるはずである。羊水は、胎児の食道から胃袋までを隈なく浸し、さらに肺の袋にも達している。へその緒を介して血液のガス交換が営まれるので、ここではどんな呼吸も必要ではない。胎児のこの「羊水呼吸」は、その後、半年にわたって続けられる。この間、心臓の発生は、一心房一心室（魚類型）から、二心房一心室（両生類・爬虫類型）へ、さらに二心房二心室（哺乳類型）へと発達を遂げていく。

母胎の中で羊水に浸かった胎児が、その小さな肺で「羊水呼吸」をおこなっている姿は、「太古の海」での鰓呼吸を思わせるものがある。そして、約十カ月後にいよいよ誕生の時をむかえると、狭い産道を通過する間に、肺の中の羊水がしぼり出され、産声とともに外界に出たその瞬間に、「羊水呼吸」にかわって空気による肺呼吸がはじまる。まさにこの「羊水呼吸」は、肺を空気呼吸の機能を備えた器官にまで発達させるためのプロセスであり、トレーニングの過程でもある。

こうして母胎から外に出た胎児は、二度目の「上陸」を敢行したことになる。一度目は、胎内の「太古の海」での、系統発生史上の両生類から陸上爬虫類への転身であり、二度目は、胎児にとってはじめての、母胎の「海」から現実の陸上への進出である。しかも、二度目のこの「上陸」は、哺乳動物としては、二足歩行以前の発達段階での敢行なのである。

人間に特有な「家族」誕生の契機

薄暗い「太古の海」に別れを告げ、母胎から離れて大地に「上陸」したこの人間の新生児は、高度に発達を遂げた哺乳動物の乳児として、これまでとはまったく違った想像を絶する世界で成育することになる。人間が母胎から外に出た誕生時の状態は、哺乳動物の中のさらに霊長類のうちでも例外的な地位を占めている。それは、一種の「生理的な」、つまり「常態化してしまっただと早産」だと言われている。このことは、人間の胎児が、高度に発達を遂げた哺乳動物の子供の段階まで母親の子宮の中で育ちきってしまうのではなく、それよりもはるかに早い時期に、未成熟な段階ですでに母の胎内を離れて世に出される、ということを意味している。

一方、人間以外の高等な哺乳類の子は、たいへん発達した筋肉組織と感覚器官をもって生まれてくる。そして、その両者は、神経組織によって脳髄と十全に連動し、機能している。それは、成育した親の姿をそのまま小さくした縮図であり、その運動や行動は、誕生時からほとんど親に酷似している。有蹄類、アザラシやクジラやサルなどがそうで、例えば仔馬などが、生まれ落ちてから数分も経たないうちに自力で歩きはじめようとする情景を思い浮かべれば、よく分かるはずだ。

霊長類の子に限って見ても、誕生時から離巢性をもつものに分類されるべきものである。チンパンジーの子は、生後一カ月半も経てば、母親にしがみついて立つことができる。つまり、人間の新生児から見れば、いずれにしても、筋肉組織と感覚器官がはるかに発達を遂げ、この両者が神経組織によって脳髄と十全に連

動してから生まれるのである。

こうしたことから、人間の生まれたての赤ん坊のあり方が、どんなに特別な、尋常一様なものでないか、そして他の高等哺乳類にあてはまる法則からは、どんなにかけ離れた存在であるかが納得できるはずである。人間の胎児は、母胎内で「巣立つもの」の段階へと成育を続け、開かれた感覚器官と完成した筋肉組織を持つ、ある意味では仔馬の段階、つまり、あらゆる哺乳類に特徴的な完成された段階にまで達するのであるが、胎内でこのような長い発達の段階を通りながら、生まれたばかりの新生児は、不思議なことに恐ろしく未成熟でたよりなく「能なし」なのである。この矛盾は、人間の形成過程が他の哺乳類や霊長類には見られない特別なもので、人間に特有なものであるということを示唆している。

生まれたての人間の新生児の脳髄は、他の高等哺乳類や霊長類に比べて著しく大きく複雑であり、それだけに、成熟に必要な時間が長くなる。とすると、脳髄が発達途上にあり、神経組織によって感覚器官・筋肉組織とも十全に連動していないこの自律不能の期間を、どう解決するかが問題になってくる。高等哺乳類の段階ならば、それを母の胎内での胎生期間、つまり妊娠期間を長くすれば解決できる。しかし、さらに霊長類、その中でも類人猿と人間のあいだでは、脳髄の発達水準の高さの点で、もう一度かなり飛躍しているところに遭遇する。そこでもう一度、自活できない依存的な時期をどう乗り越えられるかが、問題になってくる。妊娠期間を再度さらに一カ年ほど延長すればいいということにもなるのであるが、ここでは、こうした予想される解決法からはほど遠い、まったく新しい方法がとられたのである。

つまり、妊娠期間の延長による解決ではなく、高等な鳥類の「巣ごもり」の道、すなわち、両親による誕生後の細心のねばり強い養護と注意によって解決する道が選ばれたのである。生まれたての人間は、器官など身体の基本構造から見れば、「巣立つもの」であるけれども、しかし、一種独特な両親への強い依存性を特色とする解決方法が採用されたということになる。

ここに、他の哺乳類には見られない、人間に特有な「家族」誕生の契機がある。つまり、脳髄が高度で複雑であることに起因しておこる、人間に特有な「常態化された早産」が、霊長類の中でも例外的な「たよりない能なし」の新生児を胎外に送り出すこと、それゆえに、その子が自立できるまで、長期にわたる「養護」が必要であること、これが、人間に特有な「家族」の発生をもたらしたということなのである。この「家族」は、母を中核に据えた恒常的で緊密な、ごく小さな血縁的「人間集団」として形成される。

「家族」にこのように特別な方法で依存するのは、哺乳類の中では人間だけである。生まれたてのよく保護されている類人猿の子には、行動や態度や運動、あるいはコミュニケーションの手段において、本質的に新しいものが生じてくる可能性は、もはや与えられていない。

ところが一方、人間では、他の哺乳類であれば、まだ暗い母のおなかの中で、純粹に自然法則のもとで温和に発育を続けなければならないはずのこの時期に、この「子宮外的な時期」を与えられたことによって、突然、社会的・歴史的法則のもとに立たされ、本質的に新しい特殊な発達の可能性がひらかれることになった。類人猿は、完全な完成形に近い、終局的なごんまりした状態に急速に成長するのに対して、人間は、それまでとは比べようもなく多様で複雑で刺激的な子宮外の自然的環境のもとで、「巣ごもり」によって、ゆつくりと時間をかけて成長していく。そして、このことが、人間に特有な「家族」、「言語」、「直立二足歩行」、そして「道具」の発生という、地球の生物進化史上、まったく予期せぬ重大な「出来事」をひきおこすことになったのである。

3 「家族」がもつ根源的な意義

新生児は、人間形成にとって決定的に大切な誕生以後のほぼ一年間を、母の暗いおなかの中で、自然法則

のもとで発育するのではなくて、「常態化した早産」によって外界に生まれ出ること、多くの刺激のみなもとをもつ大地と自然の中で、同時にはじめは「家族」の中で、そしてやがてより広い社会的環境の中で、まだどのようなにもなる可能性を秘めた素質に、様々な体験を通して刺激を与えられながら過ごすことになる。

この生後第一年の乳児を思い浮かべると、脳髓がいかに指導的な役割を果たしているかにすぐさま気づく。それは、具体的には、動機体系の強さ、直立すること、話すこと、そして世界を体験しようとする努力の強さなどに見られる。

まず、「養護の強化」のために自然にあらわれてくる、母親を中核にした父親・兄・姉・祖父母・おじ・おばなどとの緊密なコミュニケーションの中から、必然的に音声言語が発達し、このことによって、さらに脳髓の発達が促進される。それがまた人間に特有な「二足直立歩行」を惹起し、さらに両手の自由の獲得によって、「道具」の使用へとすすむ。「言語」、「二足直立歩行」、「道具」の三者が緊密に内的に連動しつつ、「二足直立歩行」をはじめ十一〜十二カ月ごろになると、ことばの模倣が盛んになり、脳髓を一層刺激し、新たな発達段階へとすすむ。

「直立二足歩行」、「言語」、「道具」の使用という人間的特徴が、そもそもはじめからどんなに社会的特徴をもつ現象なのかということが、この状況をつぶさに想像するだけでも明らかに becoming。周囲の人々の助けやそのおかし、励ましと、幼児の側の創造的な能動性と模倣への衝動、この二つの側面は分けがたく相互作用を絶え間なく営みながら、その発達過程を特色づけている。乏しい本能によって固定された行動様式しかもたない他の哺乳類とはちがって、練習しながら本当に人間的な可能性を成熟させつつ発達する人間のためには、どんなに長い時間がそこには必要であるかが分かってくる。と同時に、個体発生の様々な発達現象との密接な連関によって、一人の人間の発達はじめて成立することも理解できる。

こう見てくると、人間に特有な「常態化された早産」に起因して派生した「長期にわたる養護」が、人間に特有な「家族」をもたらすこと、そしてその「家族」が、人間発達にとっていかに根源的で基底的な役割を果たしているのか、その重大さに気づくのである。

しかも、人間の場合、どの哺乳動物よりも、どの霊長類よりも、その発達は緩慢であり、長期にわたっている。性的成熟の時期、つまり生殖可能な状態に到達する時期が、他の哺乳類のウシの場合であれば、誕生から一年半ないし二年、ウマが三〜四年、サルが四〜五年、チンパンジーでも八〜十年であるのに対して、人間は十三〜十五年といわれている。他の哺乳類や霊長類に比べて、人間の性はいかに成熟が遅く、したがって、世代交代までの期間がいかに長いか分かる。

このように、人間の「家族」が極めて長期にわたって安定的であることを考えあわせると、人間にとって「家族」というものが、人間発達の不可欠の場として、他の動物の場合よりもいかに大きな意義を有しているかが、一層はつきりしてくる。

以上のように考察してくると、「家族」、「言語」、「直立二足歩行」、「道具」という四つの人間の発達事象は、相互に深く密接に作用し合うものでありながらも、なかならず「家族」は、他の三つの事象の根っこにあつて、それらの発達を支える基盤を形成しつつ、それ自身の役割をも同時に果たしていることが分かってくる。つまり、「家族」は、四つの事象の中でも、ヒトが人間になるための最も基底的な役割を果たしてきたと推論できるのである。しかも、受精卵から成人に達するまでの個体発生が、「直立二足歩行」が可能になり石器をも使用する最古の人類があらわれた二百数十万年前から今日に至るまで、永続的に繰り返されてきたことを思う時、「家族」は、「常態化された早産」が発生したその時から今日まで、人間が人間であるために、必要不可欠の役割を演じ続けてきたといわなければならない。

「家族」がヒトを人間にしたのである。そして、「家族」がなくなった時、人間は人間ではなくなるので

ある。

人間に特有な「道具」の発達が人類史を大きく塗り替えた

受精卵の子宮壁への着床から成人に至る人間の個体発生の過程は、人類が出現して以来、これまでも繰り返されてきたし、これからも永遠に繰り返されていくであろう。だとすれば、「常態化された早産」によってあらわれる脳の未成熟な「たよりのない能なし」の新生児も、これから先も永遠に繰り返されて、母胎の外にあらわれてくることになるであろう。

子宮内の変化の少ない温和な環境から、突然外界にあらわれた新生児の新たな環境は、母の胎内とはまったくちがったものである。それは、「家族」という原初的ないわば社会的環境と、それをとりまく大地という自然的環境、この二つの要素から成り立っている。人類が出現した時点から数えても、今日まで少なくとも二百数十万年の間、人間の赤ちゃんは、子宮内の温和な環境から、突然、この二つから成る環境、すなわち原初的な社会環境である「家族」と、大地という自然的環境に産み落とされ続けてきたことになる。昔と変わらず今日においても、胎外に生まれ出たこの未完の素質を最初に受け入れ、「養護」する場合は、ほかでもなく「家族」であり、それをとりまく大地である自然なのである。そして、どのようでも変えうる可能性を秘めたその未熟な脳髄は、繰り返しの「社会」と「自然」という二つの環境から豊かな刺激を受けつつ変革され、人間特有の発達を遂げながら、他の動物とは際立った特徴をもつ人間につくりあげられてきた。

人間形成のこの二つの環境は、少なくとも二百数十万年という長い人類史の大部分の間、主として自然界の内的法則のみに従って、基本的には大きな変容を蒙ることもなく、緩慢な流れの中にあつて、時代は過ぎていった。ただし、原初的な社会的環境である「家族」の方が、まず先行して、ゆっくりではあるが徐々に

変化の兆しを見せはじめる。

すべての動物がそうであるように、人間も、自然とのあいだの物質代謝過程の中ではじめて、生命を維持していくことができるのであるが、人間の場合、この物質代謝過程を成立させているのが労働である。この人間労働は、自然を変革すると同時に、人間自身をも変革し、人間特有の脳髄の発達を促し、それが機縁に「早産」が常態化して、人間に特有な「家族」が編み出されてきた。すでに見てきたように、この「家族」を基盤に人間発達のその他の三つの事象、「言語」、「直立二足歩行」、「道具」が相互に密接に作用し合い連鎖しつつ、人間は、他の動物にはない特異な発達を遂げてきたのである。

こうした人間特有の三つの事象の中でも、とりわけ「道具」の発達は、人類史を大きく塗りかえていく。ささやかな原始的石器から、高度に発達した現代の巨大技術体系に至るまで道具の発達を辿ると、生産力の爆発的ともいえる驚くべき凄まじい変化をまざまざと見せつけられる。その間、人類始原の自然状態から、古代奴隷制、中世封建制を経て、近代資本主義に至るまで、生産手段（土地と生産用具）の所有のあり方に注目するならば、直接生産者と生産手段との原初的結合状態から次第に分離へとむかい、ついには資本主義の成立によつてはじめて、両者は完全分離の状態に達する。一方の極には、社会的規模での莫大な生産手段が集積し、それを私的に所有する資本家層が形成され、他方の極には、生産手段から排除され、自らの労働を商品として売る以外に生きる術のない圧倒的多数の多数的な大群が、賃金労働者としてあらわれてくる。

ここで注意しなければならないことは、この生産手段と直接生産者である人間との完全分離は、少なくとも二百数十万年ともいわれる人類の長い歴史から見れば、たかだか近代資本主義の成立以後の、ごく短い二、三百年の間におこった現象にすぎないということである。つまり、人間は、二百数十万年ともいわれる長い人類史のほとんど大部分の間を、自己のもとに生産手段を結合させた状態で、何らかの形の「家族」を基盤に、これをすぐれた労働の組織として機能させながら、自然と人間との間の物質代謝過程を維持してきた。

その意味でも人間にとって「家族」は、自然に開かれた回路であり、自然と人間とをつなぐ接点であり続けてきたと言える。

「家族」はこれからも人間が人間であるために根源的な役割を果たし続ける

こう見てくると、「家族」は、人類の歴史のほとんど全期間を通して、先にも触れたように、他の動物とはちがう、ヒトが人間として発達する重大な契機となった「言語」と「直立二足歩行」と「道具」を生み出し、かつ、それらの発達を促す母胎ともいえるべき基底的で大切な役割を果たし続けてきたことが分かる。

「家族」が直接、生産手段との結合を保っている間は、基本的には「家族」本来の機能は失われずに維持されてきた。生産手段と「家族」の分離が決定的になったのは、世界的に見れば一八世紀のイギリス産業革命にはじまる近代資本主義の成り立ちからのものであり、わが国であれば、戦後の一九五五年からおよそ二〇年間の高度経済成長期でのことであった。二百数十万年の長きにわたる人類の歴史からすれば、「家族」のこの激変は、まさにこの間の一瞬のうちの出来事であったといわなければならない。「未熟な新生児」を受け入れ、ヒトを人間たらしめ、さらには人間の発達を支え、それを長期にわたって保障してきた「家族」は、生産手段からの完全な乖離によって、「家族」に固有の機能を急速に衰退させ、変質を遂げていった。そして、今日世界を風靡している市場原理至上主義「拡大経済」は、さらに「家族」の変質を執拗に迫りながら、人間の発達を保障するもうひとつの場、すなわち自然をも短期間のうちに急激に悪化させ、人間のライフスタイルの人工化を根底からとどまることを知らぬ勢いでおしすすめていったのである。

こうした「家族」の急激な変化と自然の荒廃の後にあらわれた「未熟な新生児」は、たまったものではない。「家族」と自然というこの二つの大切な受け皿を失い、人間や自然との豊かな触れ合いを閉ざされたまま、一気に「世界最先端のIT社会」という大地から隔絶された虚構の世界に投げ出されるのである。この

「家族」と自然の急激な変化によって、「未熟な新生児」は人間になることを阻害され、人間の「奇形化」の進行をも余儀なくされていく。

「個体発生は、系統発生を繰り返す」というテーゼのもつ意味を重く受けとめるならば、人間が人間であり続けるためには、自然に根ざした「家族」が、これからも基底的な役割を果たし続けなければならないはずである。自然に根ざした「家族」がなくなった時、おそらく人間は人間ではなくなるにちがいない。このことは、今日、市場原理至上主義「拡大経済」が荒れ狂う中で、自然との回路を断たれた「家族」が、「家族」に固有のきめ細やかな本来の機能を失い、空洞化し、崩壊の危機に晒されているまさにその時に、子どもの世界にこれまで想像もできなかった異変が次々に発生し、深刻な社会問題を引き起こしていることから見ても、十分に領けるであろう。幼い「いのち」のあまりにも大がかりな犠牲による、あつてはならないこのような「社会的実験」によってでは、か、「家族」のもつ根源的な役割とその意義が立証されないとすれば、それは、あまりにも残酷で恐るべき仕打ちであるというほかない。

それにしても今や私たちは、自然が、そして「家族」がこれまで人間にとって根源的であったし、これからも人間が人間であるためには、未来永劫にわたって「家族」と自然が根源的であり続けなければならないということも、理論的にも、また今日の世界の現実からも、ようやく明らかにすることができるようになってきたのである。それは、「家族」が、そして「地域」が疲弊し、衰退と崩壊の一端を辿る中で、人間がズタズタに分断され、「無縁社会」の闇に呑み込まれていく今日の凄まじい現実、つまり日本社会が根っこから崩れていく姿を目の前にして、多くの人々がこのことに気づきはじめてからではないだろうか。

☆引用・参考文献☆

- J・S・ミル『女性の解放』岩波文庫、一九七七年
ベーベル『婦人論』(上)(下) 岩波文庫、一九八一年
水田珠枝『女性解放思想の歩み』岩波新書、二〇〇〇年
マルクス、訳・解説 手島正毅『資本主義的生産に先行する諸形態』国民文庫、一九七〇年
エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』国民文庫、一九八九年
アドルフ・ポルトマン『人間はどこまで動物か』岩波新書、一九六一年
時実利彦『人間であること』岩波新書、一九七〇年
三木成夫『胎児の世界』中公新書、一九八三年
松沢哲郎『進化の隣人ヒトとチンパンジー』岩波新書、二〇〇二年
山極寿一『「サル化」する人間社会』集英社、二〇一四年
山極寿一『家族進化論』東京大学出版会、二〇一二年
瀧井宏臣『こどもたちのライフハザード』岩波書店、二〇〇四年